まさかの転生物語

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
まさかの転生物語

【Ｎコード】
Ｎ８６９０Ｘ

【作者名】
暁

【あらすじ】
犯罪に巻き込まれ、大事なものを守るために
自らを犠牲にし、死んだ主人公。
天命より前に命を落としたため、
彼女はこの世界への転生が叶わなかった。
そうして転生したのは、異世界。
……ドラゴンに転生したようです。

大きなドラゴンであるお父さんやお母さん、
お兄ちゃん、お姉ちゃんに囲まれて、
まだまだ小さなドラゴンの主人公は突き進みます。

なお、残酷描写は保険です。
最初のほうは残酷描写を出すつもりはないですが、
おそらく、途中から出てきますので。

あの日を想う（前書き）

すっごい気まぐれに書いてみました。

人外生物が主人公の連載小説書いてみたかったんですよね。

あの日を想う

守らなくては。この子達だけは、守らなければ。
私はどうなってもいい。死んだってかまわない。
だけど。だけどこの子達だけは……。

だから、逃げなさい。私のことなんて放っておいて。
早く、安全な場所まで行きなさい。絶対に振り向かないで。
イヤホンをはめて、まわりの音が何も聞こえないように。
聞いてはいけない。聞いたら狂ってしまうかもしれない。
だから、何も聞かずに逃げなさい。

――――そして、ここには戻ってくるな。

私は、あなたたちさえ無事ならばそれでいい。あなたたちさえ日常に戻ることが出来たなら。

ねぇ、どうして戻ってきたの？　どうして泣いているの？
暗闇の中で、ふと思う。
あの子達が泣いている。悲しそうに、辛そうに。

――――泣かないで。
重たい腕を必死で動かす。重たい瞼を必死で持ち上げる。
そして、口を動かす。

「……に、泣いて……の、ちびっこ……」

「っ！　姉ちゃん！」
「え！？　姉ちゃん！！」
「この、泣き虫……おちび……ズが……」
「ちび、じゃないもん！」

おいおい、泣かないで欲しいのに、どんどんと涙が溢れてるよ。
これは、動かしづらい私の手じゃ、拭いきれないな。

「い……から、泣くな……。……げろ……」

泣かないで早く逃げて。早く、安全なところへ。
私は放っておいてかまわない。だから、早く逃げなさい。

「逃げない！　お巡りさん、いるもんっ！　も、すぐ、救急車も、来るから！」
「は、犯人も、捕まった、よ！」

そか、この子達は大丈夫だね、警察がいるのなら。
でもね、おちびーズ、救急車は多分、無駄だよ。私は多分助からない。
致命傷を負うと痛みを感じないって本当なんだって、今実感してる。
――――痛みを感じない。体の感覚が何も、何もないんだ。
分かるのは、傷口からどんどんと血が流れていく感覚、どんどんと体から熱が消えていく感覚だけ。

「な……くな……て……。寧ろ……笑え？」

ねぇ、だから最期に笑顔を見せて？　この目に、あなたたちの笑顔を焼きついて逝かせて？

あぁ、可愛い私の従妹たち。泣かないで、嘆かないで。
２１年の人生は、良いものではなかったけれど、私は幸せだよ？
――だって、可愛いあなたたちを守れた。私が、あなたたちの未来を繋いだ。
私自身の未来はどうでもいい、どうせ死にたかったんだから。だけど、あなたたちの未来だけは、守りたかったんだ。

だからね、私は不幸じゃないんだよ？

あぁ、目の前が少しずつ暗くなっていく。音も遠くなっていく。
あの子達が泣いてる。ずっと、ずっと泣いてる。
だけど、私の瞼に焼き付いているのは、最期に見た、あの笑顔。
涙を流しながら、それでも私の要望に応えて微笑んだ、あの笑み。

もう、何も見えない、何も聞こえない。

―――深い闇に、堕ちた。

ようこそ死の世界へー！　目を覚ましてすぐにかけられた言葉は、これでした。

死の世界。つまり私は死んだ、と。まぁ、それもそうか。あれだけ殴られ、刺され、嬲られってすれば死ぬだろうね。

でも、目を瞑れば見える、あの子達の笑顔。涙を堪えて必死に微笑んだ愛らしい姿。

そんな、可愛いあの子達を守ることが出来たのだからよしとしよう、うん。

まぁ、とりあえず。私は近くにいた人を捕獲し、声をかけた。

「とりあえず、いろいろと説明が欲しいです」

「はいはーい！　じゃ、簡単に説明していきますねー！」

まず、ここは先ほど言ったように死の世界、死した人の集まる世界です。

普通は、天命に従い、人はこの地を訪れます。ですが、たまに天命に逆らい死した人がいるんですよ。

――――あなたのように。

普通、天命を果たし死した人たちは、しばらくこの地で過ごし、輪廻の輪に戻っていきます。

ですが、あなたたちのように天命を果たさずに死した人たちは違います。

天命を待たずに死した人たちは、この世界に転生することが出来ない。

ですが、天命を待たずに死した人たちの中には、あなたのように望まずして死した人、あなたたちのような人たちもいますし、自ら死を選んだ人もいます。

その人たちを、みんな一緒くたに考えるわけにはいきません。

ですから、あなたたちのように望まずしてこの世界に来た人たちには、しばらく魂を癒してもらい、異世界に転生してもらいます。

その際は、我々が絶対に幸せな生活になると保障し、そしてお助けしましょう。

だから、あなたはしばらくお休みなさい。

今はただ、その魂を回復させるために、眠りなさい。

目覚めは最悪です（前書き）

ここでドラゴンに転生します

目覚めは最悪です

真っ暗。全部真っ暗。
その中に、ひびが入ったように、光が射す。
何だろう、そう思いながらもどんどんと襲ってくる睡魔に身を委ねる。
おそらく、まだ魂が回復していないのだろう、そう思いながら――。

だが、その眠りは長くは続かなかった。
次にぼんやりと目を覚ますと、先ほどよりも見える光が大きくなっている。
これは何ぞ。

とりあえず、触ってみた。硬いようで、硬くなさそうで……。
これって、叩いたりすれば割れて、もっと光が入るんじゃね？
そう思いながら、少しずつソレを叩く。
お、お！　予想通り、少しずつそれは割れて、徐々に光が射し込んで来た。
――それはいいけど、眩しいな。

そうやってしばらく叩いて、やっとソレは完全に割れ、空が見えた。
えっと、視界に大きく口を開くドラゴンが見えるんだけど、気のせいかな？
私、食べられる？　え？　もうお終い？　早くね？
そう思っていると、大きく口を開いていたドラゴンは、私の顔を

舐めて来た。

「ぴぎゃーっ！！」

可愛くない声ですみませんね、これが地です。

とりあえず、これが夢落ちだと祈って、今は眠ることにします――。

うん、夢落ちじゃなかったよ。でも、今はそのドラゴンも人の姿を取っています。

目の前でドラゴンから人になられては、夢じゃないと信じざるを得なかった。とりあえず、何て言ってるかは全然分からないけどね。

そして、何となく実感。私は人間ではなく、ドラゴンに転生したようです。

まだ全身をしっかり見てないから分からないが、鱗に包まれた体や、鋭い爪、そして両親であろう二人の大きなドラゴンを見れば、自分もドラゴンだと何となく予想は出来るものです。

それにしても、この世界のドラゴン、っていうか私小さいな！ドラゴンの子供が単純に小さいだけか？　父や母であろうドラゴンは大きかったしね。

私の普段の生活場所は、この広大な山の中、の母であろうドラゴンの人態を取ったときの頭の上だ。

まぁ、ふあふあしてて、暖かくて気持ち良いんだけどさー。

まだ、この人たちが何て言ってるか全然分からないし。

でも、たくさん愛情が注がれていることだけは分かる。だって、二人とも私を見る目はいつも優しくて、私を見るときはいつだって笑顔だから。

まぁ、今そんなことを考えていたって何も始まらない。とりあえず、眠たいから寝よう。

転生を認めました

４歳になりました。最近、やっとお父さんたちの言っていることが理解できるようになって来ました。

だけど、まだ全然話すことは出来ません。何を言おうとしても、「ぴぎゃー」や、「きゃるー」とか、「きゅるるー」としか発音されないのです。

――――ちくしょう！

あ、体はあんまり大きくなってないよ？　だって、まだお母さんの頭の上で暮らしてるもん。殆ど。

「エーデルフィア、今日は山頂に行ってみる？」

「きゅるー！」

行くー！　本当はそう答えたいのだが、やはりまともな発音はされなかったか……。そろそろ普通に話がしたい……。

あ、エーデルフィアってのは私の名前みたいだよ？　言葉も理解できなかった頃から、ずっとこの言葉は発せられてたからね。

「きゅる、きゅるるるるー」

「そぅんなに山頂が楽しみ？　エーデルフィアは可愛い子ね」

うん、楽しみだよ。だって、山頂からはこの山がきれいに見渡せるもの。

そうして到着した山頂。そこでは早速私が思い切り叫んでいた。

やっほー！！

「きゅるーっ！！！！」

あっはっは、やっぱりこんな感じにしかならないか。でも、私の下でお母さんは面白そうに笑っていたよ。

「エーデルフィアったら、元気いっぱい」

「きゅる、きゃるるー」

だって、山が見渡せるから楽しいもん！　そうしていると、私たちのいる場所に、一匹のドラゴンが飛んできた。

大きな青色のドラゴン。あれ、お兄ちゃんらしいです。

「母さん、エーデルフィア」

「サーファイルス。よくここが分かったわね」

「エーデルフィアの声が聞こえたからね。エーデルフィア、母さんに隠れてないで、姿を見せておくれ？」

って言ってもね、お兄ちゃんのドラゴンの姿、大きすぎて怖いんだ。大体、人態でも十分私から見れば大きいのに。

だからせめて、人態を取って？　怖いよう怖いよう。

「きゅー、きゅるぅ」

「あれ？　俺、怯えられてる？　何で？　何で？　エーデルフィア、俺、怖くないって」

「……ドラゴンの姿が怖いんじゃない？　あまりにも大きいから。私たちも、ドラゴンの姿をとったら大体避けられるからね」

うん、確かにお父さんもお母さんも、ドラゴンの姿をとったらまず、逃げます。だって大きすぎて怖いもん。

私、まだまだまだまだ小さいんだよ？　お母さんの髪に隠れられ

るほど小さいんだよ？
　その状態で、普通のドラゴンのカタチのお父さんやお母さんは怖いに決まってるでしょ？　――踏み潰されそうで。

「えっと、これでいいの？」

　お兄ちゃんはそう言うと、ドラゴンから人間へと姿を変える。うん、それならオッケーです。

「きゅる」
「エーデルフィア！　あぁ、相変わらず小さくて可愛い」
「きゅる、きゅるきゅるー」

　お兄ちゃーん。小さな体で羽を広げ、パタパタと飛んでお兄ちゃんの頭に移動する。お兄ちゃんの髪、短くてつんつんだから、お母さんの髪に隠れてるときほど気持ちよくないんだよね。
　でも、優しいお兄ちゃんだから好きだよー。

　ちなみに、お兄ちゃんの見た目年齢は、大体高校生くらい。実年齢は知らない。教えてもらえないし、まともに話せない今は聞けない。
　でもま、どうでもいいか。みんな優しいしー？

「きゅるきゅー」

　お兄ちゃん大好きー。

「あー、エーデルフィアは本当に可愛いなー」
「さ、そろそろ山を下りましょうか。サーファイルス、ドラゴンに戻って、お母さんたちを乗せて行ってくれる？　エーデルフィア、

お母さんのところに戻っておいで」
「きゅるるー！！」

お兄ちゃんが大きなドラゴンに戻るのならば、今すぐに！！　とりあえず、お母さんの髪に隠れて、大きなドラゴンの姿を見なくて良いように丸まっておこう。

「エ、エーデルフィア……」
「きゅるー」

私はお母さんのところへ戻ると、しっかりとお母さんの髪を掴み、落ちないようにする。
そして、私がいなくなると、お兄ちゃんはすぐにドラゴンの姿に戻ったらしい。お母さんがその背に乗り、お兄ちゃんは飛んだ。
お兄ちゃん空飛んでるよ怖いよ。お兄ちゃん大きいよ怖いよ。

それからさほど経たずに、私たちはねぐらである洞窟へと戻った。おとーさーん！！

「お？　お帰り、エイシェリナ、サーファイルス、エーデルフィア」

そこにいるのは見た目２０代前半の赤髪の男。これ、お父さん。名前はフォンシュベル。あ、エイシェリナって言うのはお母さんの名前ね。お母さんも同じく、２０代前半にしか見えない。ちなみに、髪の色は青。

「きゅる、きゅるきゅーきゅ」

私はそうやってきゅるきゅる鳴きながらお父さんの頭へと移動する。あ、美味しそうなにおい。

「美味しそうなにおいだろう？　今日はうまい肉を手に入れたからな」

そう言ってお父さんが見せるのは、美味しそうなお肉を使った料理。こんがり、いい色に焼けてるね。美味しそうだ。

そんな意味を込めてきゅるきゅる鳴くと、お父さんは嬉しそうに微笑んだ。

「うむ、エーデルフィアがそう言うならば、今日の料理は中々のものだな」

「本当に美味しそうなにおい。ね、フォンシュベル、みんなを呼んできても大丈夫？」

「あぁ、みんな散らばってるだろうが、頼んだぞ。エーデルフィアはどうする？　お母さんと一緒にみんなを呼びに行くか？　お父さんといるか？」

「きゅ」

お父さんといる。そう言う意味を込めて、お父さんの髪を掴んだ。お父さんは微笑む。

「よし、お父さんと一緒にいるんだな。あー、エーデルフィアは可愛すぎだ」

「きゅっきゅー」

お父さん好きー。ドラゴンの姿さえとらなければ、ね。とりあえず、お母さんたちが戻ってくるまではお父さんに甘えていようっと。

「ん？　エーデルフィア、羽が汚れてるぞ？　ちょっと待ってなさい」

その後、自分の頭から私をとり、抱き上げたお父さんは告げる。いつ汚れたんだろう？
それから濡らした布を持ってきたお父さんは、優しく私の羽を拭いてくれた。はわわ、気持ちいいよ……。気持ちよすぎて、寝ちゃいそう……。

「うーん、落ちないなぁ。……洗うか？」

え！？

「中々落ちないし、汚れたままだと染み付いて取れなくなりそうだから、洗おう。な？」

はい、イヤです。人間の頃はお風呂は好きだったけど、この小さな体でお風呂はおぼれそうで怖いです！
そう言いたいが、言えない。お父さんはその間にも、私のお風呂の用意をしていたよ……。私をテーブルの上に置いて。
少しずつ、逃げようかな。……うん、テーブルの下を見ると怖い。高い。でも、逃げなくちゃ……。

落ちた。うまく羽を広げ切れなくて、落ちちゃった。

「エーデルフィア！　何をしているんだ、危ないだろう」
「きゅいー」

あわわ、お父さんが怖いよぉ。思いっきりテーブルから落っこちたからね。思いっきり体打っちゃったからね。痛いよ。

「きゅい、きゅーくるるる」

「あぁもう、痛かっただろう？　まだ小さいんだから無理をするんじゃない」
「きゅー」

ごめんなさい、お父さん。

「ちゃんと反省したか？　なら、お風呂に入ろうか。お風呂に入れば、気持ちよくて痛いのも忘れられるぞ？」
「きゅ！？」

なぬ！？　お風呂から逃げるために落ちて、結局お風呂に入らなくてはならないのか！　で、でも痛くなくなるなら……。怖いけど。
あ、でもお湯に浸かってる間はあったかくて気持ちいいなぁ。

でも、上からお湯かけないで！　上からお湯をかけられると怖い！

「きゅい！　きゅきゅい！」

上からかけられるのは怖いって！　怖いんだって！

「よし、きれいになってるな。どうするエーデルフィア？　もう少しお湯に浸かっておくか？」
「きゅ！」

浸かっておく！　そんな意味を込めて鳴く。だって、温かくて気持ち良いしさ。しかも、さっきの恐怖と気持ちよさで、痛いのどっか行っちゃったしね。

「ただいまー。フォンシュベル、エーデルフィア」

「きゅい！」

お母さんとお兄ちゃん、そしてほかのお兄ちゃん、お姉ちゃんたちが帰って来た。私は急いでお湯から抜け出し、飛んでお姉ちゃんたちの下へ向かう。

「わわ！　お風呂入ってたんだね、びしょびしょ。ほら、まずは体拭こうね」

これを言うのは一番上のお兄ちゃん、カーヴァンキス。そして、私が飛びついたのはその妹、お姉ちゃんのオースティアだ。

あ、もちろん二人とも人態取ってるよ？　ドラゴンの姿だと私が寄って来ないから、逃げるから。

乾いた布で私の体に、鱗を伝う水をきれいに拭ってくれるカーヴお兄ちゃんとティアお姉ちゃん。

その後は、みんなでご飯だ。みんなは手づかみか、スプーンやフォークっぽいもので食べているが、私はまだこの手で上手に掴んで食べられないので、そのまま皿に盛られた料理にかぶりつく。

まぁ、お父さんもソレが分かってるから、私のご飯は食べやすいものばっかりと考えて作ってくれるんだよね。お父さん大好き。

はぐはぐとかぶりつく肉。肉美味しい。でも、野菜も美味しいんだよ？　ドラゴンは肉食で野菜は食べないって言う勝手なイメージがあっただけに、おかずに野菜が出たときはびっくりしたけど、美味しいからそれでよし。

「旨いか？」

「きゅ！！」

「うん、美味しい」

「今度調理方法教えてくれ」

「あ、俺も」
「フォンシュベルは本当に料理好きよね。私が料理する暇がない」
あはは、お母さん、料理やめて。前、頭の上からお母さんの料理見てるとき、本当に怖かったんだから。
よく分からない調味料を大量にいれるは、その辺の加減を知らないは、何かを焼けば絶対に焦がすはで。
確かあの時は、お兄ちゃんたちが帰って来た瞬間に飛びついていったんだっけ。で、お兄ちゃんたちの頭の上で丸まってた。
「げ！？　お母さん何してるのさ！？　エーデルフィアが怯えてる！！」
「あら？　どうしたの？　お母さん怖くないでしょ？」
「……あぁ、この意味不明物体のせいか。お母さん料理やめて。怖すぎ」

そのおかげでお母さん、よっぽどのことがない限り料理をしなくなりました。最近ではお母さんの料理を避けるために、サーファお兄ちゃんやカーヴお兄ちゃんが料理を覚えるようになった。
おかげで、あの黒魔術的な料理を見ることは無くなったよ、安心。
「美味しかったー。おとーさんごちそーさま」
「きゅきゅいー」

ホント、美味しかったなぁ。お父さんのご飯は美味しいから好きだな。
「さ、ご飯も食べたし、エーデルフィアはそろそろ寝なくちゃね。いっぱい食べていっぱい寝て、大きくなろうね？」
「きゅ！」

大きくなるなら寝る！　いっぱい食べていっぱい寝る！
そうして私専用の小さなベッドに飛んで下りた私は、そこに置かれたやわらかい布の上で、きれいに体を丸める。気持ちいいー。
よし、眠たくなった、おやすみなさい。

狩りに行きましょう

１０歳になりました。やっと日常生活で困らないくらいに話せるようになりました。いやいや、お父さんたちにはかなり苦労をさせたなぁ。私が中々話せないから。

でもまだ、やっぱり体は小さいんだよねぇ。未だに私の生活の場のメインはお母さんの頭の上だからね。

でもいいの、楽しいから。私の考えてることが、やっと伝えられるようになって嬉しいから。

「エーデルフィア、今日は何が知りたい？　俺たちが何でも教えてあげるよ」

「んとね、そうやって人間の姿をとる方法が知りたい！」

ちなみに、しゃべれるようになってからの私は、とにかく質問攻めだ。お父さんに聞き、お母さんに聞き、お兄ちゃん、お姉ちゃんに尋ねまくりだ。

あれはどうなってるの？　あれはどうしてああなるの？　どうして？　どうして？

小さな子供特有の興味の持ち方で、毎日を質問と回答の日々になっている。

「エーデルフィアが人間の姿を取るのは、まだまだ無理だよ？　これは１００を超えたあたりから、自然に分かってくるものだし」

「そーなの？　うー、残念ー」

人間の姿を取れるのならば、練習してでも人の姿になりたかったのにな。……でも、今の私が人になったら、何歳くらいに見えるんだろ？　幼児？　小学生？　どっちもイヤだわー。

でもまぁ、今はまだちびちびドラゴンでいいや。そのほうがお母さんの髪に隠れられるからね。

「ほら、おいでエーデルフィア」

そうしてお母さんに呼ばれた私はお母さんの髪の中に移動する。パタパタ、羽を動かして移動した。

お母さんの髪の中って落ち着くんだよなー。小さい頃からずっとここばっかりだからねー、あはは。

「ちょ、お母さんばっかりエーデルフィアと一緒はずるいって。エーデルフィアおいで。一緒に狩りに行こう？」

「きゅ！？」

あ、しまった。つい普通に鳴いちゃった。でも、狩りは行きたい！　行きたいよ！

「ほーら、行きたいならおいで。外に出て、俺の背中に乗って」

それと、お兄ちゃんたちのドラゴンの姿もやっと怖くなくなったよ。お父さんたちはまだ大きすぎて怖いんだけどね。

その後、外に出たカーヴお兄ちゃんがドラゴンの姿を取り、その上にお兄ちゃんたちが人態のまま乗り込む。そして私は、お姉ちゃんの頭の上だ。

そうして私たちが乗り込むと、カーヴお兄ちゃんは大きな羽を広げ飛び立つ。おぉ、地面がよく見える。

「エーデルフィア、危ないから身を乗り出したらダメだよ」

「って、言ってるそばから飛ばされそうだよ。エーデルフィア、ち

ょっと抱き寄せるよ」
「きゅ、きゅきゅ……」

身を乗り出して下を見ていた私。その結果、飛ばされかけたらしい。サーファお兄ちゃんが私を抱き寄せてくれた。うん、これで飛ばされないね。

抱き寄せた後のサーファお兄ちゃんが真剣な目で注意してくるから、ついつい普通に返事せずに鳴いちゃったじゃんか。

「怒ってないから顔を見せて？　大丈夫だから」
「きゅー」

あわわ、本当に怒ってない？　怒ってない？　怖いよ。怖いと、どうしても普通に話せずに鳴き声をあげちゃうんだよね。

「怒ってないって。だからね？　ほら出ておいで」
「きゅきゅー？」

本当？　そう尋ねたいのだが、話せなかった。鳴き声で尋ねることとなるが、サーファお兄ちゃんはあっさりと理解してくれた。

「怒ってないよ。でも、今度からは気をつけてね？」
「きゅ！」

なら、大丈夫、かな？　でもまだ怖くて話せないんだけどね。でも、もう少ししたら恐怖も消えて、話せるようになる、と思う。

そうしてサーファお兄ちゃんに抱き寄せられたままでしばらく飛ぶと、いつも狩場にしている場所にたどり着いた。

「さ、さっさと下りてくれ。俺も人態を取る」
そうしてカーヴお兄ちゃんも人態を取ると、獲物探しの時間だ。
とりあえず、私はお姉ちゃんの頭の上だが。
「エーデルフィアはここ、お姉ちゃんの頭の上。危ないから勝手に動いたらダメだからね」
「うん！」
お姉ちゃんから離れると危なくない？　私、お姉ちゃんたちの使う魔法？　魔術？　まだ全然使えないんだから。
「お、いたいた。ティア、エーデルフィアを頼むぞ。サーファ、行くか」
「ん。エーデルフィア、何があっても、絶対に、ティア姉から離れるんじゃないよ？」
そこまで区切りながら言わなくても。離れたら危ないから、きちんとティアお姉ちゃんと一緒にいるって。
私、たったの１０年で死にたくないよ？　前世でも２１年しか生きてない、ただの若輩者だったんだから。
「よし、合図をしたら頼むぞ」
「おっけ」
「……、Ｇｏ！」
カーヴお兄ちゃんが言うと同時に、サーファお兄ちゃんが魔法だか魔術だかを放つ。威嚇ってヤツかな？
そして、獲物がそれで怯んだ瞬間にカーヴお兄ちゃんが飛び込ん

だ。おぉ、かっこいい。あっという間に一匹仕留めた。

「きゅ？」

ってあれ？　いきなり視界が動いた。……さっきまで私たちのいたところがお兄ちゃんの放った魔法で真っ黒けです。

そしてその真っ黒けの地面には、何かもう一匹獲物がいた。……つまり、私たちはその獲物に襲われかけていたと。それに気づいたティアお姉ちゃんが避けて、お兄ちゃんの放った魔法に焦がされたわけか。

うん、びっくりした。

「大丈夫、エーデルフィア？　いきなり動いたからびっくりしたでしょ？」

「きゅ、きゅう……」

お？　うんと答える予定が、鳴いて答えるになっちゃったぞ。相当びっくりしてたんだね、私。

「でも、大きいのが獲れたから今日はいいのが食べられるよー」

「きゅきゅ！？」

なぬ！　何ですと！？　いいのが食べられるのは歓迎でしょう！

「お、機嫌は戻ったみたいだね。なら、帰ろう。ほら、背に乗って」

そうしていると、いつの間にかお兄ちゃんが人態を解いて、ドラゴンの姿に戻っていた。私はしっかりとお姉ちゃんの頭の上に乗り、髪に掴まる。

それを確認したのかどうかは分からないが、お姉ちゃんもドラゴ

ンの姿となったカーヴお兄ちゃんの背に乗った。
うふふ、帰ったときのお父さんの反応が楽しみだなぁ。

「おぉ！　いいのを捕まえてきたな。今日はご馳走だな」

帰って、獲物を見せたときのお父さんはすごかったよ。目を輝かせてお兄ちゃんから獲物を受け取ってた。
今日は本当にご飯が楽しみだ。

そして、帰って来た私、現在お母さんに捕まってます。

「お帰りなさい、エーデルフィア」
「お母さん、私たちには？」
「お帰りなさい、エーデルフィア」

おぉ、お帰りの挨拶が私限定。つまり、これはこっちに来いと、そういうことだね。

「きゅっ」

んちょ、よいしょ。羽を広げてせっせと飛び、お母さんの下へ向かう。

「お帰りなさい、エーデルフィア。あなたたちもね、サーファイルス、オースティア、カーヴァンキス」
「おかーさんただいまー」
「エーデルフィア、怪我は無い？　大丈夫？」
「大丈夫だよー、お兄ちゃんたちが守ってくれるもん」

だから、大丈夫だって！　そんなに強く抱きしめないで！！　痛い、痛いから！

「きゅ、きゅきゅるー！！」

咄嗟のときは普通に話せないから、それで悟って離して！

「お母さん、エーデルフィア、痛がってない？」

「きゅ！」

分かってくれた！　助けてお兄ちゃん、お姉ちゃん！

「あら？　大丈夫でしょ？」

「きゅ……きゅい……」

最早話す余裕もない時点で気づいてもらえるかな？　お母さん。痛い痛い痛い痛い痛い。

「痛がってる！　痛がってるから！！」

「あぁ、ゴメンねエーデルフィア。さ、あなたはお昼寝の時間だから、休もうね」

お昼寝？　狩りについて行ったら、絶対に帰ってきてすることはお昼寝だよね、疲れてないのに。でも了解、きっちり寝ます！　大きくなるためにもしっかりと休みます！

そうして、昔と比べて少しずつ大きくされている私専用のベッドに移動し、きれいに丸くなる。

じゃあ寝るけど、ご飯の支度が整ったら起こしてよ！　ご馳走楽しみなんだからね！

ちゃんと起こされたよ。って言うか、いいにおいが漂い始めてぼんやりと目を覚まし始めたら起こされた。ごはーん！

「エーデルフィア、いいにおいがしてるだろう？　ご飯だよ」

「うん！　いいにおいー！」

肉の焼けた美味しそうなにおいが漂ってるねー！　うん、ばっちり目は覚めた。

「おはよう、エーデルフィア。よく眠れた？」

「いっぱい寝たー！　お腹空いたー！」

このいいにおいには逆らえない！　早く食べようよ。

そうして私がテーブルの定位置につくと、お父さんとお母さんが微笑み、スプーンとフォークに手をつけた。

――食事開始の合図ですね、分かります！！

いっただきまぁす！！

目の前に置かれた、こんがりと焼けた肉に思い切りかぶりつく。

うん、すっごい美味しい！

だが、そのままかじるのでは、骨に付いた肉をきれいに食べきることが出来ないぞ！　それが悔しい！

が、だがね！　私が自分できれいに食べようとしても、ドラゴンの手と爪じゃきれいには取れないのだよ！　悔しすぎる！

「エーデルフィア、貸してごらん。きれいに取ってあげる」

「お姉ちゃん！　お願い！」

お姉ちゃんのありがたいお言葉に、私は横に座るお姉ちゃんに皿ごと肉を手渡す。きれいに取って！　きっちり食べる！
……まぁ、私はドラゴンの姿だし、骨も食べるんだけど、肉は肉。骨は骨で別に味わって食べたいんだ。

「ほら、きれいに取れた。でも、骨も残さず食べなきゃダメだよ？　これも、尊い命なんだからね」
「うん！　ぜーんぶ、ありがたく、美味しく食べるよ！」

私たちは、常日頃から命を喰らって生きているのだから、それを忘れてはならない。私たちが食べているこれも、尊い命。私たち生き物は皆、命を喰らうことで、自らの命を繋げているのだから。
そうしてきれいに取ってもらった肉を食べた後は、骨だ。骨はこの両の手でしっかりと掴んで、がじがじと齧る。噛めば噛むほど味が出る。最高！

そして食後。……まだ寝ないよ！　お昼寝したもん、ご飯前に起きたばっかりだもん！

「さ、エーデルフィアは……」
「寝ないよ！」

先に釘を刺すべし！

「さっき起きたばかりだから眠くない！　だから寝ないからね」
「でも、寝ないと大きくなれないよ？」
「う！！　で、でも眠くないもん！」
「横になってるだけで、眠たくなれるかもよ？　だから寝ようね」
「や！　眠くない！」

早く大きくはなりたいけど、寝れないもん！　ま、まぁ前の狩りのときは帰ってきてお昼寝して、それからすぐご飯食べて、その後すぐに寝ちゃったけどね。
でも今日は眠たくない！　この間はご飯のときもうとうとしてたから寝たけどさ。

「いいから寝ようね、エーデルフィア」
「きゅっ！！」

って、いきなり持ち上げないでよお父さん！　まだ寝ないって！！

「あっはっは、相変わらず可愛い鳴き声だ。でも、成長のためには寝なくては」

くぅ！　可愛いとか褒めても、それでも寝ろとのたまうか！　で、でででも、ここできちんと寝れば早く大きくなって、人態を取るのも早くなるかな……。
……よし、今はベッドに丸まっておくだけ丸まっておこう。それで眠たくなればよし、眠れなければ泣き付けばよし！
結果、私はお父さんに抱えられたままでベッドまで運ばれ、下ろされた。

「ほら、いい子だから寝ようね」

むぅ！　仕方あるまい、眠れるかどうかは置いておいて、とりあえずベッドで丸まろうじゃないか。

人間は怖いです

きゅるっ？　そんな声で鳴きながら私は目を覚ました。結局あのまま眠れたみたいだね。

ってあれ？　まだまわり暗いね。まだ夜？　そう思いながらベッドを出て、近くで眠っているであろうお父さんたちを探す。

「きゅる？　きゅるー？」

ってあれ？　いない。もう起きてるの？　まだ暗いよ？　お父さんたちってこんな早くから起きてるの？

「きゅっ、きゅっ」

「ん？　エーデルフィア、もう起きたのかい？　起きるにはまだ早いよ、もう一度お休み」

鳴きながらお父さんたちを探していると、案外早く見つかった。結構そばにいたよ。

「ほら、ベッドに戻ろう。しっかり寝て、大きくなろう。な？」

「きゅ、きゅー」

うぅ、ずっと寝てばっかりだよ。でも大きくなれるって言う言葉には勝てない……。早く大きくなりたいけど、寝てばっかりなのも……。

そう思っている間にも、お父さんは私専用ベッドへと運ぶ。……この籠ベッドから逃れられるのはいつの話だろうなぁ。

最初から比べれば少しずつこの籠ベッドは大きくなってるけど、どこまで大きくなるんだろ。

「いい子だから寝ようねー」

結局寝かされるのか、面白くないな。

でも、ベッドに戻って丸くなれば簡単に眠れるのが幼さ故か……。

――まいっか。

とりあえずくるっと丸まり、目を瞑る。眠れるかどうかは別として、こうしてるだけでお父さんが安心、というか何も言わなくなるならそれでいいよね。

きゅっ？　いつの間にかまた眠ってたみたいだね、びっくり。寝れないと思ってたのになぁ。

あたりを見渡すと、もう明るい。よし、朝だね。これで起きてもベッドに戻されないよね。

「きゅっ、おかーさん！」

「おはよう、エーデルフィア」

「あ、起きたんだエーデルフィア。今日は何をする？」

お兄ちゃんたちもお母さんと一緒にいたんだね。今日は何を教えてもらおうかな。

昨日の肉が残ってるはずだから、今日は狩りには行かなくていいだろうし。だから、うーん、どうしようかな。

……！　そうだ、こうしようっと。

「食べられる草と、食べちゃいけない草の見分け方教えてー」

分かれば、草を摘みに行くだけなら私一人でも行けるようになるからね。いつまでもお兄ちゃんたちと一緒じゃ、効率悪いし。

「よし、ならもう少ししたらいつも草を摘みに行く場所に行こう。そこで教えてあげるね」
「うん！」

きゅい！　鳴きながらお礼も込めてお兄ちゃんたちの周りをふよふよと飛び回る。そんな私を見つめるお兄ちゃんたちの目は本当に優しい。
あはは、お兄ちゃんたち大好き。そう思いながら飛んでいると、不意にお母さんに捕まった。え？　何？

「エーデルフィア、あの子達がいるから大丈夫だとは思うけど、気をつけるのよ、いい？」
「うん！　よっぽどのことがあったら、お母さん呼ぶね」

多分大丈夫だと思うけど。

「何かあったら、大きな声で呼びなさいね。ドラゴンになって、エーデルフィアたちを助けに行くからね」

分かった、大きな声で呼ぶよ！　おかーさーんっ！　って呼ぶからね。そのときは助けてよ。

それからしばらくして、私はドラゴンになったお兄ちゃんに乗り込み、いつも草を摘む場所へと向かう。
緑！　緑！　緑！　きれいすぎる！　いつ見てもきれいすぎだ！

「よし、じゃあお兄ちゃんたちの食べられる草講座を開講しようか」
「うん！」

お兄ちゃん、よろしく！

「まず、これ。絶対に食べちゃダメだよ？　食べたら死んじゃうから」
「ふえ！？」
「俺たちには大して害はないけど、エーデルフィアは小さいから、簡単にこの毒にやられる」
「こ、怖い……」

この毒にやられるのは私だけですか。くぅ！

「まぁ、これはすぐに分かるから大丈夫だよ。ほら、ここ見て」

カーヴお兄ちゃんはそう言って、葉を裏返す。そこには黒い毛？のようなものが生えていた。

「これはこの辺の草で唯一、裏側に黒い毛のようなものが生えてるんだ。だからすぐに分かる」

な、なるほど……。それは簡単でいいかもしれない……。

「なら次。これは食べられるけど、こっちは食べられない。そっくりだから間違えないようにね」
「ん、んー？　どう違うの？　全然分かんないよー」

そう言って見せられた草は、全く同じものにしか見えなかった。じっくり見せてもらっても、どう違うのか全く全然分からない。
お兄ちゃんたちからその草を両方とも受け取り、見比べてみる。
……あれ？　どっちが食べてもよくて、どっちがダメなんだっけ？
あれ？　あれぇ？

「お兄ちゃん、どっちが食べてもいいんだっけ？」
「右に持ってるほうが食べても大丈夫なほう。左に持ってるのは、絶対に食べないように。いい？」
「はーい！」

なるほど、右に持ってるほうは食べても大丈夫で、左に持ってるのは食べたらダメなのか。うん、見分けがつかない。
うーん、じっくり見ても全然分からないぞ？　お兄ちゃんたちはどうやって見分けをつけてるんだろう。

「お兄ちゃんたちはどうやって見分けをつけてるの？　全然分かんない」
「ん？　見てもわかんないよ？　これはにおいで区別するの」

説明はお姉ちゃんがくれました。におい？　におい……。

「くちゃっ！！」

た、食べられないほうの草のにおいが恐ろしいほどやばい！　すっごいくさい！　ありえないにおいだ！

そうしていると、不意に私たち以外の声が耳に届いた。その瞬間、カーヴお兄ちゃんは人態を解き、ドラゴンの姿に戻って私たちを庇う。
何か話す声だね、何て言ってるのかはよく分からないんだけどさ。

「お、おい……、ここどこだよ……」
「知るかよ！　でも、早く戻らないと……」
「ここって、竜神様のいらっしゃる山だぜ！？　無礼にならないうちに帰らなくちゃ」

「なら、帰るための道を探して来いよ！」

……？　竜神様？　っていうか、迷子？

「しっ。エーデルフィア、喋らないで」

「きゅ？」

「人間は絶対に敵ではないと言い切れないの。今からお兄ちゃんが追い払うから、それまで黙っていて」

人間って、敵なの？　微妙なところなのか。そうしていると、さすがに大きなドラゴンの姿に戻っているカーヴお兄ちゃんの存在に人間たちが気がついたようだ。

「りゅ、りゅりゅりゅ、竜神様！　も、申し訳ございません、迷ってしまいまして！！」

「町へ戻るなら、あっちの道だ。早く帰れ」

カーヴお兄ちゃんはそう言って、ある方向を指差す。あっちに町があるのかぁ、行ってみたいなぁ。

そうしている間も、お兄ちゃんは人間たちが町へと戻るのを待っていた。……あれ？　人間と目が合った？

「ち、小さなドラゴン！？」

「きゅ！？」

あ、あわわ。思いっきり目が合った。ガン見された！　あわ、あわわわわ。げ、限界！

「――ぴぎゃーっ！！」

思い切り叫んじゃったよ。だって、あんなにしっかり見られると怖いじゃん！

「とっとと帰れ。弟妹たちに手を出したらそのときは……」

そうやって私が叫んでお姉ちゃんにしがみ付いたからか、カーヴお兄ちゃんのまとう雰囲気が怖くなった。あわわわわ。

お兄ちゃん怖い。人間怖い。お兄ちゃん怖い。人間怖い。

「――――おかーさーんっ！」

ばさっ。

呼ぶと同時に羽を動かす音が耳に響いた。ぴぎゃーっ、お母さんのドラゴンの姿は大きくて怖いよぅ！

お母さんはそれに気がついてくれたのか、私たちの目の前に下りると同時に人態を取った。人の姿になったお母さんに、とりあえず飛び込む。

「おかーさん！」

「エーデルフィア！　何？　そこの人間が何かしたのね、覚悟なさい」

はわわ、お母さんも怖いよぅ。でも、今さらお母さんから離れるのはもっと怖いよぅ。そんなこんなで、私はお母さんの頭の上でしっかりと髪を掴んでいた。

ちなみに、その恐ろしいお母さんを止めたのは、お兄ちゃんたちだったりする。

「お母さん、ちょっと目が合っただけだから手加減してよ！？」

「何かされたって言うわけじゃないの。なら、この姿で一回ずつ殴

るだけで許してあげる。その後は町に戻してあげるからね」

い、一応手加減されてる、のかな？　一発ずつ殴っただけで許すって言ってるし……。ってあれ？　そもそも、その人間悪くないんじゃね？

「きゅ、きゅー……」

それを訴えるために、少し強めにお母さんの髪を引っ張ってみた。でも怖いからうまく喋れない。

「あぁ、大丈夫だからねエーデルフィア。何も怖くないから」

いやいやいや、そう意味じゃなくてですね。でも、今の私じゃ普通に話せないしなぁ。

うん、ゴメンね人間さん。私じゃ、このお母さんを止めることは無理です。

結局お母さんは私を頭の上に乗せたままでその人間を殴りました。一発、グーで一撃入れました。

思い切り振りかぶって殴るものだから、私が落ちるかと思ったよ。咄嗟に髪を掴んだから落ちなくて済んだんだけどね。

「よし、これでいいわ。後はさっさと山を下りなさい」

い、痛そう……。殴られた人間の頭には、きれいなたんこぶが出来上がっていた。ゴメンね、人間さん。

「町はあっち。こっちに来ないでくれる？　可愛いこの子が怖がるから」

「は、ははは い！　申し訳ありませんでした、竜神様」

と、とりあえず早く目の前から消えてよぅ。目が合いそうで怖いんだよぅ。人間大きいから怖い！

目に涙を滲ませ、人間が見えないようお母さんの髪にしっかりと頭をつけていると、その間に人間は山を下りたらしい。お母さんが頭の上から私を抱き下ろした。

「もう大丈夫だから。ほら、人間なんていないでしょう？」

言われてずっと瞑っていた目を開く。うん、何もいないね、よかった。

「エーデルフィア、泣いてたんだね。可哀想に」

「きゅう」

お母さんに抱かれた私にお兄ちゃんたちは近寄り、私の目尻に光る涙を拭ってくれる。ありがとーお兄ちゃん、好き。

でも、転生して初めて人間を見たけど、この小さなドラゴンの姿で人間を見ると、本当に怖いな。

今日は人間の姿を取ったお兄ちゃんたちがいてくれたから怖くなかったんだけどさ、私一人で、この姿であったら絶対に泣いて帰るね。

「また人間が来ないとも限らないし、今日は帰ろう。エーデルフィア、お母さんと一緒にいてね？　危ないからお母さんから離れたらダメだよ」

「きゅ、きゅう……」

ダメだ、まだ怖くて普通に話せやしないや……。この、怖いとき

とか咄嗟のときに普通に話せなくなるっていうの、何とかならないかなぁ。

そう考えながらも、私はお母さんの頭の上で、ドラゴンの姿のお兄ちゃんの背に乗り、洞窟へと帰還するのであった。

竜神って何ですか

お兄ちゃんの背に乗って洞窟に帰って来た私たちだったが、帰ってからの私は完全にお母さんの頭の上だ。飛んで逃げようとしても、何故かすぐに捕らえられるのだ。

「お、お母さん？」
「いいから、エーデルフィアはお母さんのそばにいてちょうだい」
「きゅい？」

何でかな？　どうしてかな？　どうしてお母さんはそうやって私を捕獲するの？

何となく危険を感じるから、お父さんのところにでも逃げたいのに、お母さんは逃がしてはくれない。

「お母さんばっかりエーデルフィアを抱いて、ずるいよ。エーデルフィア、こっちおいで」

そうしていると、救い主が現れた。お姉ちゃん！

「きゅいーっ！！」
「って、喋ってくれないの？　あぁ、お母さんの無言の訴えが怖かったんだね」
「きゅ！」

怖かったよ、お母さんの頭の上から飛び立とうとするたびに捕獲の手が伸びてくるし、どうして捕まえるのか聞いても、そばにいてとしか言わないし。

だから、お姉ちゃんに呼ばれて飛んで、お母さんに捕まらなかっ

たのはよかったよ。
そういえば、お姉ちゃんに聞いたら答えてくれるかな？　ずっと、疑問だったんだ。

「ねぇ、お姉ちゃん。人間たちが竜神様って言ってたの、なぁに？」
「あぁ、それは私よりも、お兄ちゃんかお父さん、お母さんに聞いて。私もよく分かってないんだ」

なぬ？　ならばっと。

「おかーさん、竜神様って、何なの？」
「１０００年位前に、人間たちが魔物と戦っているときに手伝ってあげたら、勝手に竜神扱いされたの」
「まもの？」

この世界、そんなものもいるんだ。

「そう。この山はお父さんやお母さんがいるから魔物もいなくて安全だけど、この山を一歩でも出ると危険だからね。エーデルフィアはまだまだ出たらダメだからね」
「きゅ、きゅ！！」

それを言うお母さんが怖いです。まず、お母さんが怖いから勝手に山から下りたりしないよ。そもそも、ちびちびの私じゃ、一人で山を下りたりは出来ないよ。
私一人でパタパタ飛んでたら、山を下りる前に日が暮れちゃうって。それに、まだお母さんたちに甘えたいお年頃だから、絶対に一人はイヤ。

だから、思い切りお母さんに抱きついた。甘えたいから。いっぱ

いいっぱい甘えたいから。

「お母さん。私、お母さん大好きだよ。だから、一人にならない。絶対に誰かと一緒にいる。一緒にいて？」

「私たちの可愛いエーデルフィア。いつまでも、ずっとお母さんたちはあなたと一緒にいるからね」

「うん」

ずっと一緒にいて。私を一人にしないで。一人は、寂しい。

最近、夢を見るんだ。私が一人ぼっちになる夢。私はドラゴンの姿じゃなくて、人態を取れていて、まわりにお母さんたちがいるだろうと思って探しても、誰もいないんだ。

———誰もいない、一人だけ。私しか、いない。寂しい。

「大丈夫、お母さんたちはずっと一緒にいる。エーデルフィアを一人にはしない。絶対に、……絶対」

お母さんはそう言って私を抱きしめた。

「カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス。ちょっと来なさい」

「ん？　どした？」

「どうしたの、エーデルフィア。……って、泣いてない？　あー、何かよく分からないけど大丈夫だよー」

「何がどうだっていうの？　大丈夫だよ、エーデルフィア」

お母さんが呼ぶと、お兄ちゃんたちはすぐにそばに来てくれる。そして、代わる代わる私を抱き寄せた。

お兄ちゃんたち、温かいな。この温もりを失いたくない。だから、足掻くよ。何があっても足掻くから。

「ほら、涙を拭こうね、大丈夫だから」
「きゅ、きゅー」

もうまともに話せない。今の私の口から発せられる言葉は鳴き声だけだ。

「ただいまー」

そうしていると、お父さんが帰って来た。……そういえば、お父さんどこに行ってたんだろう。

「ちょっと町に出て、人間どもに忠告してきた。これでしばらくは山に入り込むバカはいないだろ」
「お疲れ様、フォンシュベル。少しくらい、人間の王を痛めつけてきた？」
「少しといわず、徹底的に殴ってきたよ。……宰相を」

哀れ、人間の王。っていうか、宰相。いないなぁと思ってたら、山を下りて町に出てたのか。そして、王を、というか宰相を殴ってきたのか。
あー、いろんな意味でごめん、人間たち。私が怯えたせいだね、ここまで宰相がやられたのは。
そう思ってたのが顔に出てたのかな？　お父さんは不意に私の頭に手を置いてきた。温かくて気持ち良いんだよね、これ。
「エーデルフィア、大丈夫だよ。あれはそれ相応の報いだから」
奴らはあろうことか、エーデルフィア、君を怯えさせたんだ。それくらいは普通、というか手加減したほうだよ。

お、お父さん怖い……。にっこり笑ってその言葉を放たれると本気で恐ろしいです。
家で一番怖いのはお母さんだろうけど、お父さんも結構怖かったんだね。今思いっきり実感したよ。

「きゅー！　きゅるきゅいーっ！」

だから、助けてお兄ちゃんたち。私をこのにっこりと微笑みながら怖い言葉を放つお父さんから逃がして！！
お父さんが本気で怖いです。私を捕まえて、目を合わせてにっこりと微笑みながら言うから、余計怖いです。

「お父さん、エーデルフィアが本気で怯えてるから。冗談もほどほどにね」
「きゅい？」

お姉ちゃんがお父さんから私を回収してくれたよ、その瞬間思い切りお姉ちゃんにしがみ付いたよ。
それにしても、何ですと？　冗談ですと？　本気にしか聞こえなかったんだけど。

「あぁ、本気にさせてしまったか。安心しろ、冗談だ。――半分くらいは」
「残り半分は！？」
「いいじゃないかそんなこと。それにしても、もう怖くなくなったみたいだな、よかった」

……はっ！　まさか、私の恐怖心を拭い取るための作戦！？
――あーうん、違うわ。目を合わせようとしたら露骨に目線外すし。

「おとーさん？」
「なななな、何だい？」
「残り半分は、何？」
「エーデルフィアが気にすることじゃないから大丈夫だよ。ほら、疲れただろう？　お昼寝しような」
「話変えたね？　おとーさん、本気で考えてるー！」

きゅいーっ！！　鳴きながらも、私はお父さんの手によって強制的に私専用ベッドに下ろされた。くそぅ、まだ寝ないぞ！

「ダメだよ、寝なきゃ」
「やーぁだ！　眠たくないし、さっきのお話まだ途中だよ？」
「ダメだったら。初めて人間を見て、びっくりしただろう、今日は。だから、いつも以上に休もうか」
「そうそう。疲れて寝てってしなきゃ、大きくなれないよ？　いいの？」
「きゅい！？」

く、くう……、お兄ちゃん、お姉ちゃんの説得が恐ろしくなってきたぞ……。確かに、大きくなれないのは困る……。

「ほら、大きくなりたいなら寝ようね。って言うか、そろそろ寝ないと限界が来ると思うんだけど」
「へ？」
「エーデルフィア、確か5時間以上続けて起きてたこと、ないよね？」

はっ！　そういえばそうだよ。言われてみればそうだよ！　あぁ、聞いたら眠たくなってきた……。

とりあえず、ベッドでくるっと丸くなる。

「よしよし、素直ないい子は大きくなれるよ。おやすみ、エーデルフィア」

「きゅ……、おやすみなさい」

素直な私は早く大きくなるよ！　そのためにも今はご飯までぐっすり眠っていようっと……。

「エーデルフィア、ご飯だよ。お腹空いたろう？　食べよう」

「んきゅ？」

ふわぁ、よく寝た。起きて、鼻をすんすんと動かすと、いいにおいがする。今日のご飯は、昨日のお肉の残りかな？

そう思いながら、私は少し飛んで私を起こしに来たお兄ちゃんの肩に乗ってそのまま連れて行ってもらう。人間（ドラゴン）、楽するためにはいろいろと考えなくては。

「エーデルフィア、自分で飛んで行こうよ。甘えてばっかりじゃダメだよ？」

「だって、寝起きって上手に羽動かせなくて、前一度落ちたもん。……だから、怖いんだ。ダメ？」

「う！　そ、そうだったね。でも、ご飯食べた後は、きちんと自分で飛ぶんだよ！？」

「うん！　ありがとうカーヴお兄ちゃん！　大好き！」

ちなみに、これ事実。前、寝起きの大寝惚け状態でフラフラ飛んで、落っこちた。あれは痛かった。痛みで目は覚めたけど、最初は

何で床にいるのか、何で痛いのか分からなかったもん。
目を白黒させてたら、私が落っこちたことに気がついたお父さんたちが来て、全力でかまってくれたんだっけ。

「あぁ、痛いだろう可哀想に」
「よしよし、大丈夫よ。ほーら、痛いの痛いの、どこか行けー」

子供用のこういう言葉、この世界にも、って言うかドラゴンにもあるんだね。あの時は本気でそう思った。
ただ、飛んで行けじゃなくて、どこか行けなのが若干リアル。
そして、この世界でもお母さんの手はすごい。お母さんに撫でられたら、本当に痛いのどこか行ったしね。
前世の小さい頃はお母さんの手は魔法の手だ！　って本気で信じてたけど、この世界でもそう言うのはありそうだ……。

おっと、そんなことを考えている間に、カーヴお兄ちゃんは既に私の席の前に立っていたよ。んちょ、よいちょ。羽を広げて席へと下りる。

「よし、エーデルフィアも来たしカーヴも席に着いたし、食べようか」

それからは食事の時間ですね、分かります。これは昨日のお肉ですね、美味しいです。
昨日とは味付けが変わっている、というか、昨日は焼いていたけど今日は煮込んであるようだ。味がしみていてすっごい美味しい！

というわけで、やっぱり今日も。

「お姉ちゃん、お肉取って？」

「ふふ、貸してごらん」

お肉と骨は別々に味わいたいから、きれいにお肉と骨を分けてください、ティアお姉ちゃん。

私が皿を押しやりながら頼むと、お姉ちゃんはにっこりと微笑み、肉を取り始めてくれる。うきうき、楽しみだな。

「はい、取れたよ。きれいに取れたから、純粋に肉と骨と別々に味わえるよ」

「うわぁい、ありがとーお姉ちゃん！」

言われて見てみると、本当にきれいに肉と骨とが分かれていた。お姉ちゃん大好きー！

はぎゅはぎゅはぎゅ。お肉美味しい、幸せ。がぶがぶがぶ。骨美味しい幸せ。も、最高すぎる。

「エーデルフィア、肉や骨ばかりじゃなくて、草も食べるんだぞ？」

あ、草もあったんだ。気がつかなかったや。あるなら食べるー！

「はい、最低これくらいは食べること」

……いや、食べるって言っても、これは多くない？　しかも最低？現在、私の目の前の皿には、草が山のように積まれています。お父さん、私の体の大きさ考えて。私の体と同じくらいに積まないで。

「ふぅ、盛りすぎよ、フォンシュベル。せめてこれくらいにしなさいよ」

そうしていると、お母さんがその半分以上をごっそりと移動させ

てくれた。ありがとーお母さん！　うん、このくらいなら食べるよ。

うん、食べ過ぎた。お腹がぽっこりと膨らんでるよ。いやいや、草の量が多かったからね。でも、これだけ食べても全部成長に行くのは嬉しいわー。

「エーデルフィア、いっぱい食べたね。ベッドまで飛べる？」

……、はっ！！　よし、やってみよう！

羽を広げて、羽ばたかせて……、ぼとっ。自分のお腹が重たくて飛べなかった、くそぅ。

「あー、やっぱりね。ほら、行こうか」

そうしていると、お兄ちゃんが落ちた私を拾い上げてベッドまで運んでくれた。ありがとーお兄ちゃん。

さぁ、いっぱい食べた後には寝なくては。いっぱい食べていっぱい寝ていっぱい遊ぶ。これが、今の私が大きくなるための一番の近道なのだから。

あの二人に会いに行こう

今日の私たち兄妹の目的地。それは、じいちゃんとばあちゃんのところ。

じいちゃんとばあちゃんって、私、初めて会う気がするよ。じいちゃんとばあちゃんも一応この山に住んでるのに、何故か会わないんだよね。

っていうか、どうしてお兄ちゃんたち、そんなに嫌そうなの？

どうして？　どうして？

「あぁ、大丈夫だよエーデルフィア。エーデルフィアはきっと大丈夫」

「そうね。まだ小さいから」

「あぁ、気が重い」

「？」

お兄ちゃんたち、何でこんなに嫌そうなんだろう。それに、私は大丈夫って、何？

そんなことを考えている間に、私たちはじいちゃんたちの暮らす洞窟の前に立っていた。お兄ちゃんたちが先に進むのを躊躇しています。じいちゃんたち、どれだけ怖いの？

「早く入れよ」

そうしてたら、いきなりサーファお兄ちゃんが誰かに蹴飛ばされた。……この人が、じいちゃん？

「おー？　エーデルフィアか？　大きくなったなぁ、おいで」

「きゅ？」
「どした？　じいちゃん怖くないぞ？　ほら、中に入ろうな。カーヴァ、ティア、サーファ、お前らも早く来い」
やっぱりこの人がじいちゃんなのか。そう思いつつ、抱かれたままで洞窟へと入っていくと、そこにもう一人いた。つまりこの人が。
「ばあちゃん？」
「エーデルフィア！　ジャン、エーデルフィアを私にも抱かせてちょうだい」
「じゃん？」
「あぁ、ジャンって言うのはじいちゃんの名前だ。ジャニストリスを略してジャンだな」
「じゃあ、ばあちゃんは？」
「ばあちゃん？　ばあちゃんの名前はシフォニアって言うの。だから、ジャンからはニアって呼ばれてるわ」
へー。って言うか、じいちゃんもばあちゃんも優しいじゃん。お兄ちゃんたち、何であんなに怯えてたのかな。
現在、ばあちゃんにしっかりと抱きとめられている私。さすがばあちゃん、抱き方優しくて気持ち良いな。
「最後に見たのは、エーデルフィアがまだ生まれたばかりの頃だったかしら？　本当に大きくなって」
「知らなぁい。覚えてないよ」
「当たり前よ。エーデルフィアはまだ生まれたてのちっちゃなドラゴンだったんだから」
「きゅ？」
それ、本当にいつの話？　全く知らないんだけど。全く全然記憶

にないんだけどさ。

「だから、それが当たり前よ。生まれたばかりの頃を覚えてる子なんていないわ」

それもそうか。なら、今から新しく思い出を作ろう！　ってことで、目いっぱい甘えよう！

「きゅいーっ！」

ばあちゃんに思い切り頬ずりする。ばあちゃん、すっごい嬉しそうだ。……それを見るじいちゃんの目が怖い！！

じ、じいちゃん、そんな目でこっちを見るのはヤメテ！

「ニア、俺にもエーデルフィアを抱かせてくれ。エーデルフィア、じいちゃんにも頬ずりしてくれないか？」

「んきゅっ」

そう鳴いてじいちゃんの元へ向かっていると、後ろから怖い声が聞こえた。

「――――あなたたちは、何もせずに帰るつもり？」

「きゅうっ！？」

あわ、あわわ。ばあちゃんが、ばあちゃんがすっごい怖い！

「あぁ、エーデルフィア、あなたは何も悪くないから怖がらなくていいの。私が言ってるのは、あなたたちよ。――カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス」

へ？　お兄ちゃんたち？　どゆこと？

「せっかく来たのに、どうして何もせずに洞窟から出ようとしているの。ほら、あなたたちも来なさい」

「う……うん……」

んう？　どうしてお兄ちゃんたちそんなに怯えてるんだろ。じいちゃんもばあちゃんも優しいのに。

そうやって恐る恐る近寄ってきていたお兄ちゃんたちだったが、ばあちゃんの射程距離内に入った瞬間に、蹴り飛ばされた。

「きゅ、きゅいー！！」

カーヴお兄ちゃん！　ちょ、大丈夫！？　そう思ってたら、起き上がったお兄ちゃんが盛大にばあちゃんに文句を放っていた。

「ばあちゃん！　いつもいつも、近寄って来た孫を蹴飛ばすのやめろよ！」

「おー、生意気になったな、カーヴァンキス。教育的指導っ！」

こ、今度はゲンコ！？　ゴンッて言う音がしたよ！！　お兄ちゃん大丈夫？　大丈夫？

駆け寄りたいのに、私はじいちゃんに捕まって近寄れない、くそう！

「……ってー。孫に問答無用で鉄拳かますなっての。ほら、エーデルフィアが怯えてるじゃないか」

「あ、ホントだ。エーデルフィア、こっちおいで。じいちゃん、エーデルフィア離して」

お兄ちゃん！　行く、行くから！　じいちゃん、離して！

「離すわけないだろう、バカガキ共。エーデルフィア、まだかまい足りないから離さない。カーヴァは大丈夫だ、ニアが手加減をしてるからな」

そう見えない！　どう見ても手加減してるように見えない！　カーヴお兄ちゃん！

あぁっ！　ティアお姉ちゃんとサーファお兄ちゃんがカーヴお兄ちゃんを犠牲にして、若干引いてる！

じいちゃん、私もお姉ちゃんたちのところ行きたいから離してよーっ！

「きゅい、きゅいきゅいーっ！」

離してー！　そう言いたいのにうまく言葉が発せなかった！　くそう！

でも、行動で大体何が言いたいかは分かるでしょう？　じいちゃん、離して、離してったら！

「エーデルフィア、きちんと言わないと分からないよ？」

くうっ！　じいちゃん、分かっていながら言ってるね！？　咄嗟のときはうまく言葉が発せないんだ、勘弁してよ！

「きゅい！　きゃきーっ！！」

「あっはっは、分からないなぁ」

「きゃるるるー！」

「あー、全然分からんなぁ」

おのれ、じいちゃん。分かっていながら徹底的に無視か。そう思いながらじいちゃんを睨んでいると、突然視界が揺れ動いた。

「よし、エーデルフィアゲット。帰ろうか」
「よくやった、サーファイルス。走れっ！」
「ティア姉、エーデルフィアをお願い！」
「分かった。エーデルフィア、しっかり掴まっててね！」

へ？　え？　いつの間にか私はサーファお兄ちゃんに捕獲され、ティアお姉ちゃんに掴まっていた。そして、私をしっかりと捕まえたお姉ちゃんたちは、走る。洞窟の入り口まで徹底的に駆けていた。
だが、やはりじいちゃんたちは強かった。気がついたら二人とも目の前にいたよ。目の前でにっこりと微笑んでたよ。
それを見たお兄ちゃんたちは、その場でしっかりと足が止まってた、怖かった。
でも、仕方ないよね。間違いなく後ろにいたはずのじいちゃんたちが目の前に、洞窟の入り口を塞いでたんだから。

「そう簡単に逃げられると思うか？　もう少し精進するべきだな」
「あらあら。この程度で逃げれると思われてるなんて、ばあちゃん悲しいわ」
「ちょ、じいちゃんたち怖いって……！」

あわ、あわわわわ。にっこり笑うじいちゃんたちが本気で怖いよ。そんな意味を込めて、しっかりとお姉ちゃんの髪を掴んだ。
じいちゃん怖い、ばあちゃん怖い。――――ぴぎゃーっ！

「おかーさーんっ！！」

もういやもうダメ助けておかあさーんっ！！

「エーデルフィア！！」
「おかーさん助けてもうヤだー！　じいちゃんもばあちゃんも怖いー」
「この子に何をしたの！？　お義父さん、お義母さん！」
「ん？　可愛がる以外は何もしてないぞ？　なぁ、ニア」
「もうヤダ怖いー！　きゅー！」
「大丈夫、大丈夫だからね」

じいちゃんもばあちゃんも怖いよー。もうお家帰るー。

「大丈夫よ、お母さんと一緒に帰ろうね。カーヴ、ティア、サーファ、帰りましょ」
「了解」

カーヴお兄ちゃんは言うと同時にドラゴンの姿に戻る。うん、帰ろう。もう帰る。じいちゃんたち怖いよぅ。

「んきゅー、きゅるー！！」

じいちゃんたち怖いー！　もうヤだー！　そう言いたいのに、恐怖のせいか、鳴き声しかあげることが出来ない。くそう。
でも、お兄ちゃんたちはその間にじいちゃんたちのいる洞窟を抜け出して、大空を駆けていたよ。

「エーデルフィア、俺たちがあんまりじいちゃんたちに会いに来ない理由、分かっただろ？　あんまり会いたくないだろ？　扱かれたくないだろ？」
「きゅっ？」

あれ？　質問の最後に気になる言葉があったのだが、まだ鳴くことしか出来ないため、尋ねることができなかった。くやしい。
でも、帰る間、とにかく私は頑張って尋ね続けていたよ。――――全部鳴き声にしかならなかったけどね。

「んきゅ？」

扱かれるって、どういうこと？

「んきゃう？」

お兄ちゃんたち、ずっと扱かれてたの？

「きゅー、きゃるる？」

じいちゃんたち、昔からそんなに怖いの？
――――って、いい加減恐怖よ飛んで行け！　そろそろ普通に話させろ！！

ちなみに、お母さんたちは私がずっと鳴き声しかあげないものだから、よっぽど怖かったのだろうと、とにかくずっとかまってくれたよ。それは嬉しかった。
事実、かなり怖かったからね、じいちゃんたち。最初は優しいじいちゃん、ばあちゃんだと思ってたから、余計怖かった。

「よしよし、怖かったね。でも、もう大丈夫だよ」

そうやって撫でてくれる手が優しくて。ドラゴンの姿のままで顔を舐めてくれるお兄ちゃんの瞳が優しくて。

「もう平気。ありがとー、おかーさん、おにーちゃん、おねーちゃん。――大好き」
「お母さんも大好きよ、エーデルフィア」
「俺もね」
「俺も」
「もちろん、私もね」

うん、みんな大好き。

「おっと、お父さんも忘れないでくれなー？　お父さんもエーデルフィア大好きだぞ？」
「うん！　お父さんも大好きー！」

そしてこれは後日談。お父さんはこの日、私が寝たあとにじいちゃんたちに文句を言いに行っていたらしい。
お兄ちゃんたち曰く、それは話し合いという名の喧嘩だったらしいよ？　じいちゃんたちとお父さんって、どれだけ怖い勝負になるんだろう。
とりあえず、私たちが手を出したら間違いなく巻き添えを食らうくらいに恐ろしいものだろうね、きっと。
だって、竜神様だし。お父さんも竜神様、お母さんも竜神様。なら、絶対じいちゃんたちも竜神様だろ。竜神同士の勝負なんて、考えただけでも恐ろしいや。

「だから、安心しなさい」

次の日の朝、顔を合わせたお父さんにそう言われて本気で何かと考えたよ。お父さん、じいちゃんたちに何したの？　みたいなね。
そしてね、この疑問はまだ解決してないんだよね、お兄ちゃん、お姉ちゃん。

「お兄ちゃんたち、じいちゃんたちに扱かれたの？」
「……思い出したくない過去だ」
「うん、お兄ちゃんもそうよね」
「確かに思い出したくないな、あれは」
「んきゅ？」

そそ、そんなに辛い過去なのか……。

「あ、不安にさせたみたいだね。でも、エーデルフィアはまだ大丈夫だから安心して。１００くらいになったら、じいちゃんたちに近寄らなくすれば扱かれないよ」

曰く、人態を取れるようになったら徹底的に魔術、肉体的両方で扱かれる、らしい。こわ。

つまり、今の私で考えれば扱かれるのはまだまだ先ということですね、分かりました。極力近寄らないようにします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8690x/

まさかの転生物語

2011年10月28日09時39分発行